



小手の代わりとなるサポーターと軍手



簡易竹刀



兼平主幹教諭自ら作成した胸



世田谷区立三宿中学校

シリーズ■ 中学校武道

授業の充実に向けて 147

つまずきをどう克服したか④
(コロナ禍でも実施できる剣道授業について)

東京都世田谷区立三宿中学校

新型コロナウイルス感染症の拡大で昨年4月以降、全国中学校は一斉休校中に分散登校などの対策を進めてきた。特に生徒が近距離で行う武道授業では、密を避けるための新たな工夫が必要となっている。そこで、本誌編集部はこれまで本連載で取り上げた中学校の中から、積極的な感染症対策を講じて武道授業を継続している学校に注目した。今回は昨年10月号で掲載した世田谷区立三宿中学校を改めて取材し、同校のコロナ禍でも実施できる剣道授業について紹介する。

1 武道授業の現状

2020年春より、新型コロナウイルス感染症が日本国内で急速に拡大した。そして4月には1度目の緊急事態宣言が国から出され、全国の学校現場ではさまざまな対応を迫られた。宣言が解除されてからは、感染予防を徹底して通常授業が徐々に実施されるようになった。その中でも保健体育の武道授業は生徒同士の接触や近距離になることが比

2 三宿中学校での剣道授業

較的多いため、注意深く感染症対策を行う必要がある。しかし有効な対策を打つことができずに武道授業を断念する学校も少なからずあった。本年1月には2度目の緊急事態宣言が発出され、コロナ禍の長期化が懸念されている。

2020年10月号の本欄では、安価で簡易な竹刀と防具を使用した剣道授業を実施している世田谷区立三宿中学校を取り上げ、牧野

英一校長や剣道授業を担当している兼平誠主幹教諭(剣道六段)を取材し、授業の進め方、工夫などを誌面で紹介した。

同校では、本格的で高価な防具・竹刀ではなく、兼平主幹教諭が自ら用具を手作りしていた。この簡易用具は市販の防具の20分の1の単価で作成されている。低コストでありながら、生徒の安全面・衛生面にも配慮されたユニークで工夫の施された教材になっていた。

さらに、授業では剣道の専門性にこだわるのではなく、生徒たちに随所で「考えて行動すること」を促し、体の動かし方や用具の使い方の学習を重視する授業を展開。生徒が剣道に興味を持ってもらえるような工夫も特徴的だった。

3 学校でのコロナ対応

しかし、新型コロナウイルスの影響で、三宿中も4月から5月の間休校し

たという。保健体育は「3密」になる機会が多い。また、武道授業の中でも剣道は対人競技であるため密になりやすい。このような状況下で剣道授業の再開に至るまでにどのような過程があったのか。

同校ではまず、感染症予防対策として、授業の再開に向けて年間計画を見直した。計画から外した内容と理由は以下の通りである。

- ・水泳(更衣室での更衣が密になる)
- ・柔道(相手と組み合ったり畳を介したりして感染する恐れがある)
- ・マット運動(マットを介して感染する恐れがある)
- ・ゴール型球技(身体接触のあるプレーにより体が密着する)

一方、実施されたのは陸上、ダンス、剣道、体づくり運動、ネット型球技等である。3密を避けることができる種目を教員同士で協議し、計画を立て直した。さらに授業再開時に保護者にプリントを配布し、理解を得た。

兼平主幹教諭は「体育の授業をどこまで行つてよいのかという判



授業後、使用したヘルメットを消毒する兼平主幹教諭



フェースシールドとマスクで飛沫の心配は少ない



体育館は常に窓を開け、換気している



再開後の授業は広い体育館で実施



反転学習（授業と同じ内容を家庭でも学習できる）のためのICT教材の活用。振り返り練習で活用されている



隣の生徒との距離が保たれているため密にならない



ヘルメットにフェースシールドをつける方法を説明する兼平主幹教諭

下旬に三宿中を訪れ、2年生の本年度5回目の剣道授業を取材した。担当者は兼平主幹教諭1名で、全学年の剣道授業を受け持っている。

授業の形態は一見、以前と変わらないように見えたが大きく変更された部分が2点あった。一つは場所。以前は体育館に隣接する武道場だったが、生徒の間隔を確保するため広い体育館に変更した。

体育館の窓を全て開けて、常に館内が換気されていた。二つ目は生徒が身につける防具類。以前はヘルメット、ゴーグル、軍手、簡易竹刀・防具を装着していたが、現在はゴーグルをフェースシールドに変更しマスクも着用することにした。

授業の前半は、まず男女に分かれ、2列になって前回までに学習した基本打突・しかけ応じ、基本技の面・小手・胴打ちをおさらいした。その後「面からの胴」「小手からの面」の2段技の練習を行った。

次に、これらの技の中から一つを選び、向かい合った相手に3本

断が非常に難しかったです。世田谷区が示すガイドラインはあっても授業の中身はそれぞれの学校現場に任されているので、知恵を絞ることが求められました」と振り返る。

その一方で、授業を再度見つめ直すことができ、より良い授業形態になったとも言える。「以前は面の代わりにゴーグルを使用していました。生徒から『簡易竹刀が顔に当たると痛い』という声がありました。また、鼻の部分が覆われていないため、直接当たってしまう危険もありました。コロナ禍で生徒全員にフェースシールドを配布することになり、これを剣道授業でも使用できると考え、飛沫対策を兼ねて早速取り入れました」と工夫を話した。

三宿中学校がある世田谷区では、各学校の教室でプラスチック製のパーテーションを使用するように求められたが、光が反射して周囲が見えづらいという難点があった。そこで、全生徒に視界が良好で動きやすいフェースシールドの購入を決めた。全校生徒分のフ

決める反復練習を実施した。その際、兼平主幹教諭は生徒に対し常に声出しをするように指示。フェースシールドの面とマスクを2重にしているため飛沫が飛ぶ心配はほとんどないという。

授業の後半では簡易試合が行われた。ゲーム要素のある演習のため、生徒たちも楽しそうに実践している様子がうかがえた。その後、「見取り稽古」を行った。互いの試合を見て、良い点や課題を指摘し合い、生徒同士で改善を図った。

授業終了後は生徒が用具の片付けを行っている間、兼平主幹教諭は授業で使ったヘルメットをアルコール消毒。最後の挨拶では手洗いをしっかりと行ってクラスへ戻るように指示し、授業後の感染対策もきちんと行っていた。

また、ICT教材の活用により、3学期から生徒一人一人にiPadが配布された。兼平主幹教諭はこれを授業と振り返り学習で活用。まず、授業の内容（剣道の技10種類）を撮影した動画を兼平主幹教諭自ら作成し、その後の授

エースシールドの購入を決断した牧野校長は「コロナ感染で特に意識しているのは飛沫感染です。発言を伴う授業はフェースシールドとマスクを両方着用し、完璧な対策を取っています」と学校内での徹底的なコロナ対策について語った。

牧野校長は「学校で対策をしつかり行い、日常生活で濃厚接触者にならないような工夫をすれば、感染のリスクはなく、生徒が安心して学校生活を送ることができそうです。そしてその延長線上に体育を含めた授業や行事があると思います。

生徒たちには授業では基本的にマスクをすることや手洗い・うがいの徹底、室内の換気、空間を適度に保つこと等を伝え、感染の予防を徹底しています」と話した。

再開後の剣道授業はどのように行われたのか。編集部は昨年10月

4 再開後の剣道授業



生徒と共に授業に参加する柴田教授（右）

業で学習した技の振り返り練習などで活用した。生徒たちも自宅にiPadを持ち帰って動画をダウンロードし、授業で学んだ内容を気軽に確認できるようになった。

5

柴田教授の
評価と見解

今回の取材では、兼平主幹教諭の恩師であり、簡易竹刀の発案者

でもある流通経済大学の柴田一浩教授も授業を視察した。柴田教授は学習指導要領の武道の解説にも携わる中学校武道授業のエキスパートである。中学生たちに武道の本質と楽しさを伝えるために武道授業の工夫を提唱してきた柴田教授は、兼平主幹教諭の授業について、「非常に工夫された良い授業だったと思います。私の考案した簡易竹刀だけでなく、自作で編み出した防具を実際使用しているのを見て、試行錯誤して授業を展開していると感じました」と本授業を高く評価していた。

コロナ禍での武道の授業の実施について柴田教授は「アフターコロナの中で武道授業を行うことは工夫をすればいくらでも可能だと思います。新型コロナウイルスの影響は大きく、完全な攻防を伴う武道授業を実施するには時間がかかると思っています。

面の使い回しや声出しには今回の授業のようなフェースシールドとマスクを使用するといった工夫が必要です。しかし、マスクは息苦しくなる可能性があるため、引

き続き検討していく必要があります」とコロナ禍における武道授業の課題を述べた。

6

まとめ

最後に兼平主幹教諭に授業の感想と今後の課題を聞いた。

◎兼平主幹教諭

「コロナ禍によって剣道の授業が以前より改善された部分もあるため、前回の授業よりも進んだ授業展開ができています。コロナ禍で実施した今回の剣道授業の流れ・対策は満足の出来であると感じています。

ただ、コロナの影響で保健体育の授業数が減っている学年もあります。さらに、剣道授業と陸上競技を並行して行っていることもあり、授業の間隔が空いてしまつて前回学習した内容を忘れてしまう生徒もいます。授業の最終目標は簡易的な試合を行うことですが、時間が足りていないのが現状で

す。柴田先生にいただいたアドバイスを参考に攻防の動きの教え方を改善し、感染症対策も十分に行いながら、より良い剣道授業を進めていきたいと思っています」

新型コロナウイルスの影響によって、非接触が推奨される中、武道授業を行うことは多くの工夫と労力が必要となっている。限られた時間の中で安心・安全な授業を行いつつ、生徒たちに武道の本質と楽しさをどう伝えていくのか、担当する教員の負担は少なくない。

しかし、兼平主幹教諭のように武道授業のあり方を見つめ直すことで、コロナに負けずにより良い授業の実践に繋がることを期待したい。

今回は山梨県富士吉田市立下吉田中学校の「コロナ禍でも実践できる相撲授業」について取り上げる。

（文責・和久田侑里）